

5月31日 (日) 士師記 2章	「主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された」(16節)。ヨシュアの死後、主を知らない世代が他の神々に仕え始めると、主は彼らを略奪者の手に任せた。しかし圧迫されうめく彼らを哀れに思われると、主は士師を立てて略奪者から救われる。不信仰な民に「振り回される主」。一見「格好悪く」見えるその背後に、主の深い愛があることを知らされる。
6月1日 (月) 士師記 3章	「主の霊が彼(オトニエル)の上に臨み、彼は士師としてイスラエルを裁いた」(10節)。「士師」とは「さばきづかさ」のこと。オトニエルの最初の仕事はイスラエルの民を「裁く」ことだった。人の目線ではなく、神の目線で「何が正しく、何が間違っているのか」を示すこと。オトニエルは「主の霊」に従って「裁き」を示した。私たちも「主の霊」の導きを求めていきたい。
2日 (火) 士師記 4章	「ただし今回の出陣で、あなたは榮譽を自分のものとすることはできません」(9節)。一万人の兵士を率いて女預言者デボラの前に立ったバラクは、この言葉に耳を疑ったことだろう。「バラクよ、よくぞ立った!」と褒められてよい場面だから…。しかし主のために働きをささげる時、私たちはその榮譽を自分のものにすることはできない。ここに信仰の要諦がある。
3日 (水) 士師記 5章	「女たちの中で最も祝福されるのはカイン人ヘベルの妻ヤエル」(24節)。前章のカナンの王ヤビンとの闘いで、王を一人で打ち倒したのがヘベルの妻ヤエルだった。イスラエル十二部族ではない彼女の名が賛美され、勇気ある行動の一部始終が記録されていることに驚きを覚える。大きな物語の中に埋もれがちな小さな物語に目を注ぐ私たちであれるように。

4日 (木) 士師記 6章	「主の御使いは彼(ギデオン)に現れて言った。『勇者よ、主はあなたと共におられます』」(12節)。ギデオンは十二部族の中でもマイナーなマナセ族に属し、その中でも「最も貧弱な一族」で、「家族の中でいちばん年下の者」。しかし、主は彼を「勇者」と呼ぶ。人の目にどんなに小さく非力に見えても、神が共に働かれる時、彼は「勇者」として用いられるから。
5日 (金) 士師記 7章	「主はギデオンに言われた。『手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救い…』」(7節)。ミディアンと戦うために集まった三万二千人を主は三百人に減らされた。「いなごのように数多い敵と向かい合うのだから一人でも多い方がよい」と誰もが考える。しかし主は「数」ではなく、「信仰」を求める。「主と共におられる」という「信仰」に固く立つ者を。
6日 (土) 士師記 8章	「ギデオンはそれ(金千七百シェケル)を用いてエフォドを作り、自分の町オフラに置いた」(27節)。ギデオンの勇敢な戦いを見た人々が彼を王にしようとした時、きっぱり断るギデオンは実に「格好良い」。が、やがて彼の心の高ぶりが滅びを招いていく。人間はなんと愚かで悲しい存在か。主の十字架の救いなしに私たちは神の前に立ちえないことを覚えたい。
7日 (日) 士師記 9章	「茨は木々に言った。『もしあなたたちが誠意のある者で/わたしに油を注いで王とするなら/来て、わたしの陰に身を寄せなさい』」(15節)。木々がオリーブ、いちじく、ぶどうの木に断られた末に「わたしたちの王になってください」と頼んだ先の茨が与える約束は「保護」、求める約束は「誠意」。主を知らない世代(2:10)の混乱の中でも、心に留めたくなる「たとえ」。